

《特別寄稿》

グローバリゼーション下のアジア・太平洋における 社会・文化変容と地域研究

平野 健一郎

はじめに

1. グローバリゼーションについて
 2. グローバリゼーションへの対抗
 3. グローバリゼーションの実態
——ヒトの国際移動とエスニック・アイデンティティの顕在化
 4. 受け手の側の社会・文化変容
- おわりに

はじめに

グローバリゼーションと呼ばれる現象は、今、アジア・太平洋地域でも例外なく、あらゆる社会で進行している。外からおしよせてくるものとみなされている、このグローバリゼーションという現象に対して、現地社会はどのように対応しているのだろうか。論壇ではグローバリゼーションをめぐる甲論乙駁の論議が展開されているが、現地社会で実際にどのような現象が発生しているのか、人々はどのようにグローバリゼーションに向かい合っているのかについては、案外、無視されている。それ故、アジア・太平洋各地の現地において、グローバリゼーションとその影響を実証的に調査・研究する必要がある。その研究に当っては、グローバリゼーションと現地社会をいきなり対峙させるのではなく、大きな枠組みとして、外からやってくるグローバリゼーションという現象（あるいは概念）に、受け手の側における社会・文化変容という現象（あるいは概念）を対置させることが望ましいと考える。

まず、グローバリゼーションという現象（あるいは概念）とはどのようなものであろうか¹⁾。

1. グローバリゼーションについて

最近行われた日中シンポジウムの成果として刊行された『グローバル化した中国はどう

なるか』²⁾ という本の中で、藤原帰一氏は、「グローバリゼーション」とは、①西欧化・近代化、②覇権秩序、③市場統合と相互依存、という三つの意味を持つ現象であると整理している。

藤原氏によれば、グローバリゼーションということばは、第一に、「西欧近代の拡大としてのグローバリゼーション、すなわち非西欧世界が西欧世界に統合される過程」を指すことばとして使われている。つまり、グローバリゼーションとは「西欧世界の科学技術、産業技術、統治機構、文化と理念が、非西欧世界の自発的な希望によって、あるいは西欧世界による一方的強制の結果として、非西欧世界に移転される過程」であるという見方である。この見方によれば、これも藤原氏が指摘するとおり、「近代は西欧世界に、伝統は非西欧世界に属して」いることになり、今日のアジアなどに見られるグローバリゼーションと、それに対する反発は、西欧化とそれに対する抵抗の現代版ということになる。私自身も、最近の自著『国際文化論』³⁾ で、近代アジアと近代日本による近代化と、および西欧化に対する抵抗とを文化触変の観点から考察し、それは現在にも続いていると考えられることを述べた。

藤原氏によれば、グローバリゼーションは、第二に、覇権秩序を意味するものでもある。西欧化・近代化の問題よりももっと具体的に、「第二次大戦後、アメリカ合衆国の理念と利益に従って組織化された国際機構と、その機構のもとに編成された世界市場に、それまでは統合されていなかった諸国が統合されて行く過程」がグローバリゼーションということになる。

藤原氏によれば、グローバリゼーションは、第三に、「世界市場の急速な統合と、その市場統合の各国に与える影響であり、もっと広くいえば国境を越えたモノ、人、カネの移動が増大する相互依存状況の進展として捉えられる」。今日、われわれがグローバリゼーションとかグローバル化ということばでもっとも多く表現しようとしているのは、この現象であるとも、藤原氏はいつている。

藤原氏は、周到にも、グローバリゼーションをこれら三つのどれか一つに限定すべきだとはいつていない。グローバリゼーションはこれら三つの側面すべてを含む現象であるといいつている。しかし、結論に近い部分では、「グローバル化といえは、ほとんど自動的に、抵抗するか、服従するか、という選択肢から対応を考えがちになる。……だが、……グローバル化がもたらすものは、覇権への服従でも、国家を越えた世界でもない。むしろ、政策遂行をする力は結局各国政府にしかないのに、その各国が協力しても対応できないほど肥大してしまった資本市場を前にした、混乱と無力が実情なのである。抵抗か服従かという問題ではない」と述べている。

そのように圧倒的な世界資本市場と、それを前にした混乱と無力をもたらした現実のグローバリゼーションに対して、どのような見方を取ることが可能であろうか。原田太津男氏の整理によれば、大きく三つの立場がある。すなわち、経済（市場）と国家（政府）の

関係がグローバリゼーションによってどう変化したのか、という問題をめぐる論者の立場は、グローバリスト、反グローバリスト、非グローバリストの三つに分かれるという⁴⁾。グローバリストと反グローバリスト（アンチ・グローバリスト）はグローバリゼーションを現実とみなすのに対して、非グローバリスト（ノン・グローバリスト）はグローバリゼーションを特に新しい現象とはみなさない人々である。グローバリゼーションを現実と認める人々の間でも、その評価は肯定と否定に分かれ、グローバリゼーションを肯定するのがグローバリスト、否定するのが反グローバリストである。単純に特徴化すれば、非グローバリストは国家のコントロールがなお可能とする立場、グローバリストは市場の力を肯定する立場、反グローバリストは社会の対応に期待をかける立場、と整理することができる。私は、藤原氏も指摘するように、特にアジアにとってのグローバリゼーションには近代化・西欧化の継続と見られる側面があると考え、歴史的な視点からは非グローバリストの見方も可能であり、必要であると考えたものである。ただし、近代化・西欧化からグローバリゼーションに至る過程を通じて、国家の対応能力、規制能力のみを見れば十分であるとは考えない。今日、国家は、規制緩和という行為によって市場と協調し、リスク社会を作り出して、社会に大きな負担を加えている。圧倒的な勢いでアジア社会を席卷するグローバリゼーションに対しては、反グローバリスト（アンチ・グローバリスト）の立場を取るほかないと考えるものである。

さて、もう一度、グローバリゼーションとは何であろうか。特に、アジアにとってグローバリゼーションとは何であろうか。藤原氏は、先と同じ論文で、グローバリゼーションとは「世界の東西南北を横断して進む変化であり、それぞれの地域で反対を巻き起こし、そして結局は逆らえない現実だと受け入れられている、……妖怪」であるとも述べている。ここから、先にも紹介した「各国が協力しても対応できないほど肥大してしまった資本市場を前にした、混乱と無力が実情なのである。抵抗か服従かという問題ではない」という結論につながるのであるが、「世界の東西南北を横断して進む変化であり、それぞれの地域で反対を巻き起こし、そして結局は逆らえない現実だと受け入れられている」という文章からは、反対や抵抗にもかかわらず進行する変化の現実という捉え方の方に重点を置いているように受け取れる。

これとは少し異なる見方が原田氏や宮永國子氏から提出されている。宮永氏は、1970年代以降のグローバリゼーションを、統合が進行すると同時に、反統合、分解、再構成という反作用が、目に見える形で急速に拡大する複雑な変化と捉えるべきだと主張している。「世界統合への力が働けば働くほど、反統合や分解を引き起こすというパラドックスが、現時点での、広い意味でのグローバル化には含まれている」という⁵⁾。原田氏は「グローバル化の経済的作用が、国民国家／社会編成の再編をもたらしている」と、フィリップ・サーニーを援用しつつ、今日の変化を「複合的グローバル化」と呼ぶことを主張している⁶⁾。姜尚中氏も「グローバリズムとポスト現代」という1998年の論文で、「多様なディメンショ

ンにわたる『脱領域化』と『再領域化』、『同一性』と『差異性』の重層的なせめぎ合いというように、グローバル化を描写している⁷⁾。私も、グローバル化はこのようなパラドキシカルで複雑な変化であり、このように複合的、重層的に捉えるべきものであると考える。

グローバル化がそのような反作用を含む現象であるとするならば、そこから、受け手の側における社会・文化変容という現象（あるいは概念）を分出させ、対置させることが必要となる。今日、論壇などでは、グローバル化を、受け手の社会に外から押し寄せる巨大な変化として、トータルに捉まえ、論じる嫌いがある。このような状況に鑑みると、「広い意味でのグローバル化」（宮永氏）を、外からのベクトルを持つ「狭い意味での」グローバル化と、それに対抗するベクトルを持つ「社会・文化変容」とに分け、両者の対抗関係を考察することが必要であろう。それは、グローバル化の定義—如何なる定義であれ—から出てくる、論理的な要請でもある。アジア地域研究は、現地の受け手社会に、まさにそのような対抗関係が現に展開していることを明らかにしなければならず、地域研究の本領である、現地に即した実証研究によってそうすることができれば、論理的な要請にも応えることになり、グローバル化論を豊かなものにする事ができるはずである。

グローバル化への対抗としての社会・文化変容を重視する立場から、グローバル化をむしろ中立的に、きわめて広く捉える、もう一つの定義を見ておきたい。それは、グローバル化論の代表的論客、ローランド・ロバートソンの定義である。ロバートソンは、先般の九州・沖縄サミットに協賛して宮崎で開かれた「21世紀の展望」国際シンポジウムにおいて、グローバル化を「①世界が凝縮し、連結すること、②自己の言動とのかかわりにおいて常に世界を意識すること」と定義した⁸⁾。①は time-space の contraction という事、②は、その結果として人々の意識の中に起こっている変化を言い表している。グローバル化への反作用や対応に注目するからこそ、グローバル化の変化の急速さ（①）と、人々の反応が単純な反発だけではないこと（②）に配慮する必要がある。グローバル化への対抗としての社会・文化変容を重視する立場から、その配慮を可能にするのは、この定義であろう。

2. グローバリゼーションへの対抗

80年代以降のグローバル化が引き起こす危機意識による、新たな反応として、ナショナル・アイデンティティ解体への懸念やナショナリズムへの回帰という現象がある。姜尚中氏は、グローバル化がもたらす相反的なものの重層的なせめぎ合いの中で、「ナショナリズムもまた……もまれ、ポスト・ナショナリズムのナショナリズムとして新たな再生をとげるかもしれない」と述べている⁹⁾。そうしたもみ合いの中で、グローバル化は、楽観的に、ナショナル・アイデンティティの分解を肯定的に捉え、グロー

バル・アイデンティティーへの成長を期待する。ロバートソンの定義②の単純な延長であるが、藤原氏の分類にしたがっていえば、グローバリゼーションの第一と第二の意味には無関心で、第三の市場統合と相互依存の意味を全面的に肯定する立場に立てば、これは論理的な必然であろう。しかし、この楽観的な見方はアジアの現状に適合しない。

姜尚中氏の整理によれば、グローバリゼーションへの対応策として、アジアにとっても重要な二つの主張が、アンチ・グローバリストの陣営から行われている。二つの主張は、どちらもグローバリゼーションへの危機意識から、市場経済のグローバル化への対抗思想として提起されているが、その内容は正反対ともいえるものである。一つは、「シヴィック・ナショナリズム」によって、国民的アイデンティティーの復権を唱える佐伯啓思氏の主張である¹⁰⁾。もう一つは、市民社会のグローバリズムによって、グローバル市場の暴走を国際的に規制することを提唱する坂本義和氏の主張である¹¹⁾。

佐伯氏の唱える「シヴィック・ナショナリズム」とは、グローバル資本主義のもとで不安を抱えた「中間層」のナショナリズムに訴え、国家の再定義を明確にすることで、国民国家の空間に根ざしたモーレス（国民精神）を鍛え直すためのものである。国益の再定義による国家戦略が重要であることや、国家のボーダーをこれまで以上によりハッキリと定義しておくことが主張されている。簡単にいえば、個人のナショナル・アイデンティティーの強化を求める主張である。この構想には、藤原氏の分類の、グローバリゼーションの第二の側面、米国の覇権秩序への対抗の意識が顕著である。

坂本氏の構想は、ともに国家からの「自立」を強める市場経済と市民社会型民主主義、その両者間の相克を冷戦以後の対立軸と捉え、その上で、グローバル・キャピタリズムの暴走を、市民社会とそれに基づく「市民国家」のグローバルな連帯によって規制しようとする構想である。市民社会のグローバリズムといっても、個人のアイデンティティーをいきなりグローバルな次元に高めて、というのではなく、市民社会の側から国家に圧力を加え、市民的公共性を国家の中に浸透させていく戦略を提唱しているので、確かに、グローバリストではなく、アンチ・グローバリストであるというべきであろう。この構想は、藤原氏の分類の、グローバリゼーションの第三の意味、相互依存の状況、を市民の意識の面にも作用させようとする狙いを持っている。

二つの主張は、どちらもアンチ・グローバリストの危機感に発しながら、ナショナル・アイデンティティーについて対照的な見解を出している。一方は非グローバリストに近づき、他方はグローバリストに近づくような、イデオロギー的な対立の様相を示している。両者の対立のこの面について考察することは本論の主意ではないが、両者に共通する傾向として、グローバリゼーションを圧倒的な外力と捉え、それにトータルに対抗しようとしていることを指摘することができる。それぞれが提唱する対抗策が功を奏さなければ、全面的な屈服があるのみと示唆している点も共通である。その意味では、両者とも敗北主義に近づく。その原因は、両者がともに言説にとどまり、社会への実証的、歴史的アプロー

チを欠くことにあると思われる。こうした不在はアジア研究によってこそ補正されるものであろう。

3. グローバリゼーションの実態

——ヒトの国際移動とエスニック・アイデンティティーの顕在化

佐伯氏が怖れるように、確かに、グローバリゼーションはナショナル・アイデンティティーの分解あるいは希釈化をもたらす側面を持つ。その因果連鎖は、ヒトの国際移動を例にして理解することができる。グローバリゼーションの急進展とともに、国境を越える人々の移動も急速に自由になっている。これは、グローバリゼーションの、藤原氏のいう第三の側面であり、ロバートソンの定義の①であって、ヒトの国際移動はまさにグローバリゼーションの一部にほかならない。

国境を越えて移動する人々は、もちろん、ナショナル・パスポートを携帯していなければならないが、同時にエスニック・アイデンティティーを携帯する。この点は、すでにエスニック・スタディーズによって確定されている。不法な出入国者は、ナショナル・パスポートを持たない代わりに、それだけ一層エスニック・アイデンティティーに頼る。世界の隅々にまであつという間に到達するグローバリゼーションがエスニック・アイデンティティーを刺激するということは、実証的にも確かめうる事実であると思うが、それは、グローバリゼーション言説の世界で、グローバリゼーションとローカリゼーションの同時進行、交差進行として指摘されている現象の一部をなしている。

国境を越えるにはナショナル・パスポートがなければならないように、実は、グローバリゼーションによってナショナル・アイデンティティーがなくなることはない。従来のような独占的な位置を占めないだけである。人々は、エスニック・アイデンティティー、ローカル・アイデンティティー、ナショナル・アイデンティティー、リージョナル・アイデンティティー、そして、グローバル・アイデンティティーと、自己のアイデンティティーの中に、さまざまなアイデンティティーを多層にわたって、同時に所有するようになりつつあるのではないか。多元的なアイデンティティーである。しかも、そこでは、下位のアイデンティティーが上位のアイデンティティーを邪魔することなく、並存する。個を中心にして、複数のアイデンティティーが、それぞれにグローバルな関係——全体と部分という関係——で成立する。人々のアイデンティティーは、グローバリゼーションによって、このように多元化しつつあると考えられる。エスニック・アイデンティティーの顕在化はアイデンティティーの多元化の一例であるが、最近のアジアはまさにこのことを明示しているように思われる。

4. 受け手の側の社会・文化変容

ところで、私たちアジア研究者は、アジアにおけるグローバリゼーションについて研究

しているだろうか。80年代の遅きに至るまで、私たちがアジア研究者としてやってきたことは国民統合論、ナショナル・アイデンティティー形成論ばかりであった。中国について然り、インドネシアについて然り。今日のアジア社会の実態を把握し、それによって、グローバリゼーション言説の空虚さをも爆撃するためには、私たちが急いでアジア社会の各地における具体的なグローバリゼーションの進行、その影響を究明する必要があると思う。

アジアの現地で、私たちの特技である地域研究の方法を駆使して、グローバリゼーションの実相を的確に明らかにするためには、しかし、「グローバリゼーション」は分析の概念として、枠組みとして広すぎる。先に見たように、グローバリゼーションには作用と反作用の両面が含まれるから、そのまま現地研究にも使えないわけではないが、そのままでは広すぎる。そこで、「社会・文化変容」という新しい分析枠組みを提唱し、それとグローバリゼーションとを組み合わせて、現地社会に即した分析を行うことを提唱したいと思う。すなわち、第一に、グローバリゼーションは、近代化のときと同様に、その受け手にとっては「社会・文化変容」であると考えてるのである。第二に、受け手の社会は、グローバリゼーションに受け身であるだけでなく、それに対抗していくが、対抗の運動とその成果もまた社会・文化変容である。アジアの人々にとって、グローバリゼーションは外から、上からの現象であるのに対して、内から、下からの現象として「社会・文化変容」がある、と考えるのである。今、アジアの各地で急激な社会・文化変容が起こっている、という言い方には、アジア研究者の賛成が得られるであろう。社会・文化変容は、現地社会の現象であるが、その現象を実証分析していく過程で、これを分析概念に組み替えていくことも可能であろうと考える。

今、アジアの各地で急激な社会・文化変容が起こっている。アジアの人々は今、どのような社会・文化変容をどのように主体的に進めているか。これは西欧化・近代化以来一貫したアジアの課題でもあるが、アジア研究者がその過程と実態を実証的に解明することが、「グローバリゼーションとは何か」という問い、「グローバリゼーションに対してどうするか」という問いに確実な回答を与えることになるはずである。

宮永氏は、グローバリゼーションの複雑さは、統合・反統合・再構成のパラドックスの複雑さであるから、それを、ミクロの現実の中に捉えていかなければ、実相を明らかにすることはできない、と主張する¹²⁾。賛成である。そして、宮永氏は、グローバル化とアイデンティティーを関連づけて、見事な考察を展開する。特に、1970年代、80年代の日本について、社会の主流であった官庁と企業において、間人と体育会系というアイデンティティーが、グローバリゼーションに適合的なナショナル・アイデンティティーとして形成された、と指摘する。これは大変面白い指摘である。90年代になると、そのアイデンティティーはさらに進行するグローバリゼーションに不適合となり、アイデンティティーの喪失が発生しているという。結論では、「ミクロとマクロを積極的につなぐ仕方で認識論を構築してはじめて、グローバル化による伝統や個の変容が、現場の具体的な問題として見

えてくる」と述べる。

私の提案は、ミクロで見ただけでなく、アジアでも見る、のがよいのではないか、というものである。再び宮永氏を引用すると、非西洋では、再帰的近代化の破壊力は、グローバル化による西洋近代社会の伝播であるとされる。「再帰的近代化」とは、グローバリゼーションへの反作用をも含む、グローバリゼーションによる「近代化」のことである。非西洋では、グローバリゼーションによる再帰的近代化が、すでにそこにある自らの伝統に対して、アンチテーゼとして作用するのである。西洋では、テーゼもアンチテーゼも自らの内から来るのに対して、非西洋ではアンチテーゼは、基本的に外から来る、ということになる。このような基本的な条件の違いが、同じ近代産業社会にあっても、西洋社会では個に分解し、非西洋社会では集団に凝集するという、違った傾向を生み出してきたと考えられる、というのである。

最後の問題は、アジアでは、この「非西洋社会の集団」を何と捉えるか、という問題であろう。宮永氏は、1970年代、80年代の日本社会を扱ったために、「会社すなわち国家」という集団へのアイデンティティの凝集しか取り上げられなかった。多くのアジア社会では、違うのではなからうか。たとえば、グローバリゼーションがもたらす構造変化は、具体的には、競争国家とリスク社会の出現に原因がある、といわれる。競争国家の成立はソーシャル・セーフティ・ネットの弱体化を生んでいる。多くの途上国で歴史的に存在してきた下からのインフォーマルな互助的ネットワークを大きく変容させている、といわれるが、アジア社会において、インフォーマルなソーシャル・セーフティ・ネットを提供してきた集団は何か。そこに今、どのような変化が起こっているかを、明らかにしなければならない。

今日、アジアの社会では、ソーシャル・セーフティ・ネットをめぐる変容のほかにも、次のような面にグローバリゼーションの影響としての、社会・文化変容が起こっていると考えられる。すなわち、ヒトの国際移動、エスニック関係の変化、経済活動の国際化とその社会的効果、情報技術の浸透とその影響、大都市化と居住環境の変化、生活文化の変容と意識の変化、家族・教育・労働などに及ぶグローバリゼーションの影響、社会・文化変容に対する宗教の対応、社会・文化変容に対する民族伝統の対応、NGO活動のインパクト、国境地帯における社会・文化変容などである。これらがそれぞれに地域研究の研究課題となるが、研究は個別に行われるだけでは不十分であろう。これらの課題に即する研究を相互連関的、俯瞰的に行ったうえで、以上のような諸側面における変化の集約的な現象として、国民国家の変容を追究し、また、変化への全体的対応として、文化の多様性の概念および文化多様性を維持するための文化マネジメントの方法を発見することが求められる。

以上のような諸側面におけるアジア各地域社会のグローバリゼーションと社会・文化変容は、けっして同じ結果をもたらさない。近代化の結果がそうであったように、再帰的

代化であるグローバリゼーションも、如何に大量の変化を持ちこんできても、各地の文化を一様にするのではない。確かに、これだけ変化の量が多く、スピードが速く、到達深度も深いとすれば、表面的には、各地の文化が共通化するように見える現象が表れるであろう。しかし、各地の人々がグローバリゼーションに懸命に対抗することによって作り出す社会・文化変容は、全体として見れば、再帰的近代化、あるいは文化触変であって、単純なグローバル化ではない。文化触変は個別文化の固有性を維持しつつ、文化を造りかえる文化創造であり、世界全体として見れば、文化の多様性を維持する結果につながる活動である¹³⁾。圧倒的な勢いのグローバリゼーションという同一の状況に置かれながら、それに対抗する各地の人々の社会・文化変容の営みは文化の多様性を維持する。そして、その文化の多様性が各地の文化を困難から救い出し、最終的には人類の生存を保障することになると思われる。各地に見られるグローバリゼーションと社会・文化変容の組み合わせの多様性を明らかにし、それによって世界的な文化の多様性を確認することが地域研究の使命であろう。

おわりに

グローバリゼーションは、アジア全体から、アジアの各国、アジア各国の国内社会、そして、どんな遠方のどんな小さな村にまでも、重なる層を貫いて到達している。そして、その影響とそれへの対抗としての社会・文化変容はあらゆる層の社会に発生している。それは、アジアのどの地域においても、すでに見られるか、早晚見られるものであり、日本もまた例外ではない。筆者は、比較的早い時期に、「斜めの視角」を持つアジア地域研究という地域研究のあり方を唱えたことがある¹⁴⁾。対象地域を、複数の次元にわたって集団が重なり合って存在する、重層構造において捉える必要があると考えたからである。今日のグローバリゼーションと社会・文化変容は、重層構造において捉えられなければ、意味をなさないであろう。国際社会に発するグローバリゼーションが次々と層を越えて波及し、影響と対抗としての社会・文化変容がそれぞれの層において発生し、展開する。その構造は世界のあらゆる地域に生まれている。とすれば、すなわち、国際関係研究と地域研究の合体が、これまでも増して必要なのである。そのような重層構造においてグローバリゼーションと社会・文化変容を捉えるアジア地域研究は、そのまま日本研究にもなるであろう。

重層を貫くグローバリゼーションと社会・文化変容は、最終的に個人の次元に達する。グローバリゼーションに苦しむアジアの社会において、グローバリゼーションにうまく乗るのではなく、それを社会的に超越する倫理的な個人、そういう個人が多層的なアイデンティティーの所有をテコに、アジアにも日本にも現れる可能性を、地域研究を通じて見出したい。

注

- 1) 本文は、2000年11月に行われたアジア政経学会全国大会の共通論題「グローバリゼーションの中のアジア——21世紀への課題」に、筆者が行った報告「グローバリゼーションとナショナル・アイデンティティ」の原稿を修正したものである。
- 2) 藤原帰一「グローバリゼーションとは何か」国文良成・藤原帰一・林振江編『グローバル化した中国はどうなるか』新書館、2000年、76-91頁。
- 3) 平野健一郎『国際文化論』東京大学出版会、2000年。
- 4) 原田太津男「複合的グローバル化——競争国家とリスク社会の成立」峯陽一・畑中幸子編『憎悪から和解へ——地域紛争を考える』京都大学出版会、2000年、341-395頁。
- 5) 宮永國子『グローバル化とアイデンティティ』世界思想社、2000年。
- 6) 原田、前掲論文。
- 7) 姜尚中「グローバリズムとポスト現代」姜尚中ほか『グローバリゼーションを読む』情況出版、1999年、6-7頁。
- 8) 「21世紀の展望」国際シンポジウム・宮崎におけるローランド・ロバートソンの発言要旨（国際交流基金『国際交流』89号、79頁）から。
- 9) 姜、前掲論文。
- 10) 佐伯啓思「グローバリズムという虚構」『アステイオン』1998年夏、28-66頁。
- 11) 坂本義和「世界市場化への対抗構想」『世界』1998年9月号、57-74頁。
- 12) 宮永、前掲書。
- 13) 「文化触変」の概念については、前掲拙著を参照されたい。
- 14) アジア政経学会シンポジウム「『地域研究』の新しい展開」（1980年11月）で行ったコメンテーターとしての発言（『アジア研究』第28巻第3・4合併号、1982年、63-64頁）。

キーワード グローバリゼーション 社会・文化変容 文化触変 再帰的近代化
重層構造 多元的アイデンティティ 文化の多様性 地域研究

(Kenichiro HIRANO)